

マルパ (MULPA: Museum UnLearning Program for All)

フォーラム「みんなで“まなびほぐす”美術館」開催

2017.7.8 関東学院大学関内メディアセンター

去る7月8日、横浜市にある関東学院大学関内メディアセンターでフォーラム「みんなで“まなびほぐす”美術館」が開催された。これは、(公財)かながわ国際交流財団(以下、K I F)が、神奈川県内4館の公立美術館の館長・学芸員やアートフェスティバルの実行委員等へ呼びかけ、昨年度に発足したプロジェクト「マルパ (MULPA: Museum UnLearning Program for All / みんなで“まなびほぐす”美術館—社会を包む教育普及事業—)」の最初のイベントである。K I Fでは、2004年から7回にわたり開催した「21世紀ミュージアム・サミット」の成果を継承した後継事業として、マルパを立ち上げた。マルパの目的は、「すべての地域住民」の「ミュージアムへのアクセス」を保障することにある。

これまで、こうした課題について、ミュージアムの関係者同士で話し合うことはあっても、実際にミュージアム関係者とミュージアムにアクセスしにくい人たちが一堂に話し合う機会はなかったに等しい。マルパは多様性を認め合う社会を目指して、美術館にアクセスしにくい方々との対話や地元の大学、芸術祭との連携により、既存の美術館像の「まなびほぐし」に取り組んでいる。

フォーラムは、Ⅱ部にわかれ、第Ⅰ部をオープニングトーク「障がいを超えるアートプログラム・美術館とは？」とし、ゲストスピーカーにライラ・カセム氏(グラフィックデザイナー・東京大学先端科学技術研究センター特任助教)と光島貴之氏(美術家・鍼灸師)を招いた。ともに自身の障がいを乗り越えながら、障がいのある方々に対してアートを通じた支援を行う実践者である。アートによって身体や言葉の「壁」がどのように「可能性」



フォーラム「みんなで“まなびほぐす”美術館」。第Ⅱ部は、ワールドカフェで、約130人が14のテーブルについた。テーブルごとに障がいのある方や定住外国人が入って、話し合った <写真提供:(公財)かながわ国際交流財団>

へと導かれるのか、また、多様な人が集まることのできる美術館について、それぞれのエピソードや思いが語られた。

第Ⅱ部ワールド・カフェでは、14のテーブルにわかれ、美術館の学芸員やボランティア、NGO等の支援者、博物館学を学ぶ大学生などが、「いま居るテーブルのメンバーで、やってみたいアート体験って何だろう？」等3つのテーマで話し合った。全体で約130名が参加したが、そのうちゲスト参加者として、障がいのある方々や定住外国人がテーブルごとに1人ずつ入った。各テーブルの参加者は、美術館を訪れることが難しいと感じている人たちと顔つき合わせて真剣に、美術館の楽しみ方について話しながら、そして楽しく盛り上がった。

モデレーターを務めたK I Fの野呂田純一氏は、「今回のフォーラムは、マルパにとって最初のイベントでしたが、参加者のみなさんには高い評価を頂いたと

認識しています。定住外国人や障がいのある方々などと、みんなが楽しめるアートプログラムへの夢や思いについて語り合えたことは、マルパにとっても貴重な体験で、これからのマルパの教育普及事業にも反映されると思います。オリンピックイヤーである2020年に向けて、美術館が本当の意味で地域のハブとなるよう、『社会を包む』ワークショップ等を参加館で実施していく予定です」と語る。

今後の「マルパ」に注目していこう。

<主催>

(公財)かながわ国際交流財団、神奈川県立近代美術館、茅ヶ崎市美術館、平塚市美術館、横須賀美術館、関東学院大学(平成29年度文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業「相模湾・三浦半島アートリンク」)

<協力>

文教大学国際学部(博物館学芸員養成課程)、女子美術大学芸術学部(アート・デザイン表現学科ヒーリング表現領域)



美術館の館長、学芸員、ボランティア、NGO支援者らと「やってみたいアート体験」などを語り合う



美術館のことで定住外国人と話す機会は少ない。気づきも多かった



話しやすい場にするための演出も工夫されたワールドカフェ